

戦前・南洋の日本人町を歩く

第三部 アユタヤ日本人町(上)

作家
太田尚樹

●おた・なおき 1941年生まれ。東海大学名誉教授（スペイン文明史、比較文明論）。スペインに関する著作からノンフィクションまで幅広く執筆。最新刊は、『定年後の楽園の見つけ方』。

山田長政もいた日本人町

タイ・バンコクのホアランポーン駅は、私には懐かしい鉄道の駅である。若き日に一泊八十円で泊まれる、チュラロンコン大学に近いユースホステルを根城にして東南アジアを放浪した折、随分お世話になった駅だった。後年、シンガポールまでオリエント急行に乗ったり、山下奉文将



乗ったり、山下奉文将

軍の足跡を訪ねてこの駅を何度か利用したが、ヨーロッパのそれに似たカマゴコ型したドームの駅に流れる、まったりとした空気は今も同じであった。

オレンジ色の袈裟を巻いた僧侶の集団、大きなズタ袋を担いで地方へ帰っていくオバサンたちの群れ。列車の待ち時間が何時間も、ときには半日もあるせいか、急いでいる人はどこにも見当たらない。

経典を読んでいるのか、瞑想にふけっているのか、僧侶たちはさすがに寡黙だが、脚を広げたままのオバサンたちが占拠したドームやホームの一面は、さながら帰っていくツバメの群れである。

私はアユタヤ方面に行く急行列車に時間どおり乗り込んだのだが、一向に出発する気配がなかった。それ

から半時が過ぎて、車掌も車内巡回の係員も「そろそろ出発だな」といった表情になると、定刻より四十分遅れて発車した。

早速、隣のオジサンが、赤いドラゴンフルーツを盛んに勧めてくれたので、二つ頂いた。言葉は通じなかったが、「恥ずかしながら帰ってまいりました」の名文句で知られた、グアム島から帰還した横井庄一さんに風貌が似ていた。

途中の駅から乗り込んだきた果物を売るオバサンの後からは、弁当を売りにくる娘もいる。以前はもち米を炊き込んだおにぎりは、バナナの葉に包んであったが、今は白い発泡スチロールに替わっていた。

窓外の景色に見とれていると、沼地が現れて、アユタヤが近いことを思わせた。街に入るとあらためて知ることになるが、水之都といわれたほど、河川が都市の構築に大きな役割を果たし、海外貿易の拠点であったことを窺わせている。

日本とかかわりの深い歴史の街アユタヤは、バンコクから北へ八十キロ。ホアランポーン駅を出て一時間半で、私はアユタヤの駅頭に立った。件のオジサンが、優し気に手を振ってくれていた。

山田長政とはどんな人物か

戦前の子供の「いろはがるた」の「や」は、「やまだながさまシャムにゆく」だったし、「海外雄飛の先駆者」「アユタヤ王の側近」、さらに「王朝配下のリゴール国の国王に上りつめた男」など、ロマンに満ちた伝説の人物としても、日本では広く知られていた。

対米英開戦前夜の昭和十六年（一九四二）十一月十日、陸海軍首脳による打ち合わせ会の折、マレー・シンガポール作戦の指揮を執る山下奉文中将が、隣席の連合艦隊司令長官山本五十六と交わした会話が、その日の山下の日記の最後に、「たとえ山田長政となるとも、シンガポールを落とさずば止まざるべしと、両者機嫌よく別れたり」と記されている。

国運をかけた戦争の火ぶたを切る両雄の会話に、山田長政の名が出たのは、たとえ現地で斃れ、骨を埋めることになるうとも、という強い決意表明のようである。

その山田長政とは、どんな人物だったのか。昭和四十九年（一九七四）、静岡県教育委員会が編纂した『山